

【表1】

リスクの見積評価基準

< 1 単独での抱え上げ >

単独での抱え上げ	基準 (内容の目安)	評価
大いに問題がある	・単独で利用者を抱き上げたり、持ち上げたり、引きずったりしている。	a あり
ほとんど問題なし	・適切な介助姿勢を実施している。	b ほぼなし
問題なし	・単独での抱え上げは原則行っていない	c なし

< 2 介助時の姿勢 >

介助時の姿勢	基準 (内容の目安)	評価
大いに問題がある	・前屈、中腰、坐位姿勢になる介助において、適切な介助姿勢ができていない。 ・腰をひねった姿勢を長く保つ介助がある。 ・不安定で無理な姿勢が強いられるなど。	a 不良
やや問題がある	・前屈、中腰、坐位姿勢になる介助において、適切な介助姿勢を意識しているが十分に実践できていない。	b やや不良
ほとんど問題なし	・適切な介助姿勢を実践している。	c 良

< 3 重量負荷 >

重量負荷	基準 (内容の目安)	評価
かなり大きい	・要介護者または重量物を持ち上げるなどの作業において、介護職員1人あたりの重量負荷が20kg以上になる。	a 大
やや大きい	・要介護者または重量物を持ち上げるなどの作業において、介護職員1人あたりの重量負荷はあるが20kg未満である。	b 中
小さい	・重量負荷はほとんどない。	c 小

< 4 頻度・時間 >

頻度	基準 (内容の目安)	評価
頻繁にある	・腰に負担のかかる動作が1時間あたり十数回になる。 ・腰に負担のかかる動作が数回程度連続することが切れ目なく続く。	a 頻繁
時々ある	・腰に負担のかかる回数が1時間あたり数回程度である。 ・腰に負担のかかる動作が連続することがあるが、腰部に負担の少ない業務との組み合わせがある。	b 時々
あまりない	・腰に負担のかかる回数が1日に数回程度。	c ほぼなし

時間	基準 (内容の目安)	評価
時間がかかる	・同一姿勢が10分以上続く介助がある。	a 長い
やや時間がかかる	・同一姿勢が数分程度続く介助がある。	b やや長い
あまりない	・同一姿勢が続くような介助はほとんどない。	c 短い

< 5 環境 >

環境	基準 (内容の目安)	評価
大いに問題がある	・介助を行う場所が狭い (場所が確保できない)、滑りやすい、段差や障害物がある、室温が適切でない、場所が暗い、介護に伴う動作、姿勢を考慮した設備の配置などがなされていない。	a 問題あり
やや問題がある	・対策が講じられて、ある程度問題は解決されているが、十分でない。	b やや問題
ほとんど問題はない	・適度な介助を行う空間がある。滑り転倒などの対策ができている。段差や障害物がない、適切な室温が保たれている、適切な明るさである、介護に伴う動作、姿勢を考慮した設備の配置などが配慮されている。	c 問題なし

リスク判定基準

リスク	評価の内容	評価
高	「a」の評価が2個以上含まれる	腰痛発生リスクは高く優先的にリスク低減対策を実施する。
中	「a」の評価が1個含まれる、または全て「b」評価	腰痛発生リスクが中程度あり、リスク低減対策を実施する。
低	「b」と「c」の評価の組み合わせまたは全て「c」評価	腰痛発生リスクは低い、必要に応じてリスク低減対策を実施する。

※1 【様式3】要介護者別リスク見積書の「リスクの見積項目」で評価した a b c の組み合わせによってリスクの程度を判定します。判定結果で優先度を明らかにさせ、次に【様式4】ノーリフティング導入見積表にて活用する福祉用具を決定させます。

※2 事業所によって介護職員の職場環境も異なることから、上記判定基準は絶対値ではなく、目安とします。職場環境などを踏まえたうえで事業所に合ったリスクの見積もり、判定を行ってください。

【図1】

利用者能力に合わせた福祉用具選定チャート（例）

